

2019/7/14

「何のために生きるのか」若林佳子師

「自分は何のために生きているのか」、誰でも一度は考えたことがあるでしょう。自分の将来を決めなければならない時はもちろんのこと、自分のやっていることが報われないように思う時、「いったい私は何のために生きているんだろう」と考えたことはないでしょうか。たとえば、やってもやっても仕事が終わらない上に、評価が得られなかつたり、自分のやっていることがどんな役に立っているのか見通せない時、あるいは子育ての場面で、「寝てくれない、泣き止んでくれない、食べてくれない」と、すべてが思い通りにならない上に、山のような家事に呆然とする時など、「私は何のために生きているんだろう」と途方にくれた経験をお持ちの方もいるでしょう。

しかし、たとえそのようなことがあっても、ほとんどの場合、解決しないまま、日々の生活に追われ、先に進むことが多いものです。仕事を片付けていかなければどうにもならないからとか、決まっているルーティーンに従って仕方なくやっているうちに、ちょっと良い出来事があって「報われた」と感じて疲れがふっとんだり、あるいはひと段落した後の達成感によって、「ああ、生きててよかった」と感じたりするものです。

確かにちょっとした良い出来事があると心は慰められますが、それは問題の根本が解決したわけではありません。世の中は「それが人生だ。そういうものだから頑張りなさい」「今を乗り越えれば、必ず良いことがあるから、頑張りなさい。」と私たちに教えますが、それは苦しみの中にある人にとっては、「今は苦しみから脱出する道はないよ。」と言われているようなものです。将来に備えて頑張れと言われても、なかなか報われるような出来事が起らなかつたり、苦しみの渦中で出口がないように思っている人にとっては、希望を感じることはできません。

そのような解決法は、人間の経験から生まれてきた解決方法です。神様はこれに対して別の解決方法を示しておられます。多くの人が、神が教えている本当の解決を得ないまま、一時的な解決に一時的な安心を感じて、それを繰り返す一生を送ります。

今日は聖書を通して、人の経験による励ましではなく、神様が私たちに教えておられる人生の歩み方を学びましょう。

■何のために生きるのか

さて、何のために生きるのか、と問われて、あなたは何と答えますか。

社会人の方であれば、「家族のため」「家族を養うため」と答える方が一番多いかもしれません。または、「自分の将来の夢のため」、あるいは、権力や富や名誉のため、と答える方もいるかもしれません。ただなんとなく楽しいことのために生きているという人もいるかもしれません。

これらは、つきつめるところ、他の人から認められたい、受け入れられたいという目的に集約されます。しかし、人生の目的とは、他の人から認められことなのでしょうか。もし権力が人生の目的ならば、権力を得れば得るほど幸せであるはずです。しかし、実際には、

権力は恐れと背中合わせです。お金がなければ苦しいと感じますが、お金があるからといって、必ずしも幸せになれるわけではないことを、私たちは知っています。名譽も人からの評価も時代と共に変わり、消え去っていきます。

このようなやがて消え去るものを持ても、心は満足することはできず、虚しさを消すことはできません。

「空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。」(伝道者の書 1:2-3)

仏教では、消え去るものではなく自分の身に着くもの求めよ、と教えられています。すなわち自分の人格を完成させること、道徳的な良い人間になることが人生の目的だというのです。私も以前はそのように生きたいと願っていましたが、6歳の時にすでに行き詰ってしまいました。優しく思いやりをもって人のために生きたいと願いながらも、自分を犠牲にしたくない、損をしたくないという思いが強く、自分の幸せよりも人の幸せを願うことなどできませんでした。ずるく自己中心な自分の人格を確認するたびに、私はむなしさを感じました。いくら称賛されても、自分が称賛に値しない人間であることを知っているので、虚しさは消えませんでした。

しかし、聖書は、こんな私に希望を与えてくれました。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」(マタイ 5:3)

名譽や権力で満足している人は災いです。一時的な解決に安心して満足する人は、真の幸いを知ることができないからです。

この世は、人が生れてから死ぬまでの間のことしかわかりません。なぜ生まれたのか、なぜ生きているのか、この世は答えることができません。子ども達に人気のアンパンマンのテーマソングは次のように歌っています。「なんのために生れて何をして生きるのか、こたえられないなんて、そんなのはいやだ。今を生きることで、あつい心燃える。だから君は行くんだ、ほほえんで。」結局、この世は、「生きること」が大切だと教えるばかりで、「何のために生きるのか」には答えられないのです。

しかし、聖書にはその答えがあります。聖書は、私たちには命が与えられたのは、神によってそのいのちが造られたからだと教えています。

「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。」(創世記 1:26)

「その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。」(創世記 2:7)

人は、神と同じように靈を持ち、神と交わり、神と共に生きるように造られたのです。靈は、ほかの動物にはありません。この靈によって人は神と交わることができます。つまり、

神が人を造った目的は、神と関わるためだということです。

■神と関わるとは

では、「神と関わる」とは、具体的にどのようなことを指すのでしょうか。神が私たちとどのように関わってくださるのか、有名な御言葉をあげてみましょう。

1. 愛される

「私の目には、あなたは高価で尊い。私はあなたを愛している。だから、私は人をあなたの代わりにし、国民をあなたのいのちの代わりにするのだ。」（イザヤ 43:4）

「神は実にその一人子をお与えになったほどに世を愛された。それは、御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」（ヨハネ 3:16）

人は、認められることを求めて生きています。それは、もともと神とつながっていた者が、そのつながりを失ったことによる不安のためです。その私たちに、神はまず「あなたは高価で尊い」「私はあなたを愛している」と語りかけます。神様は、どうにもならない、人の承認欲求を、まず満たしてくださるのです。

2. 敝される

「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」そこで、イエスは彼に言われた。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。」（マタイ 22:36-38）

神と私たちとの関わりとして、私たちが神を愛することが求められます。しかし、愛しなさいと言われても、よく知りもしない方を愛することはできません。どうすれば愛せるか、それは赦される体験によるのです。

神の戒めは、私たちを制約するものではなく、私たちを自由にするものです。「神を愛することを優先すればいいんだ」という物差しは、この世の中で、「〇〇でなければならない」と自分を責め立てている律法から私たちを解放します。

私たちが神を愛するようになるためには、赦される経験が必要です。そこで、神との関わりの2番目は罪の赦しを受けとることです。

3. 敝せるようになる

「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」という第二の戒めも、それと同じように大切です。」（マタイ 22:39）

神は、神を愛するように教えると同時に、人を愛するように教えます。愛するとは赦すことです。

イエス・キリストは、「どのように祈ればいいのか」と教えを請われた際に、次のように教えてています。

「だから、こう祈りなさい。
『天にいます私たちの父よ。
御名があがめられますように。
御国が来ますように。
みこころが天で行なわれるよう地でも行なわれますように。
私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。
私たちの負いめをお赦しください。
私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。
私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。』
国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。」(マタイ 6:9-13)

祈りの第一は、主をほめたたえることです。聖書は、「主をほめたたえよ」「主をあがめよ」と繰り返し教えてています。幼い頃は、神様はずいぶん自分をほめてほしいんだなあと思っていましたが、神の戒めは神様のためのものではなく、すべて人のためのものです。つまり、主をほめたたえることによって神の偉しさ・素晴らしさを深く知ることは、この神が自分を愛しているという事実を深く知ることであり、その愛によって私たちは自由になることができるのです。

そして次に、自分自身の必要のために祈ること、ことに赦しのために祈ることを、イエス・キリストは教えています。この赦しの祈りについて、一般的な「主の祈り」においては、「我らが罪を赦す如く、我らの罪をも赦したまえ」となっています。私はこの部分について、イエス・キリストはまず私の罪を赦すために十字架にかかるつくださったのに、祈りにおいては、私が罪を赦すほうが先っておかしい、とずっと思っていました。しかし、そうではなかったのです。

赦すという行為は、自分の赦しを受け取るからこそ生まれます。神が本当に私を赦してくださったという事実を受け入れるには、信仰が必要です。自分の赦しを信仰で受け取ることと、信仰でほかの人を赦すことは、同じことなのです。それは、もし、現実において赦しきれてないと私が思っていたとしても、信仰においては、赦したと主はすでに受け取ってくださっているということなのです。

「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」
(ヘブル 11:1)

保証するとは、真実として神が受領したということです。神の前では行いではなく、信仰

が真実と認められます。信じたいと願ったら、それはもう信じていると認められます。同様に、赦したいという信仰があれば、神はそれをあなたは赦したという事実として認めると言っておられます。

しかし、肉に属する思い、つまり感情が私たちの信仰を邪魔します。感情においては、赦したくないと思ったり、赦した方がいいと思ったり、赦そうと思ったり、心が乱れるので、私たちはつらく感じます。赦そうと決めても、肉に属する感情がそれを妨げようとするため、最初は、相手をコテンパンにしてくれたら赦したいです、主が復讐してくれるなら赦せます、と赦すことに条件をつけたくなります。しかし、信仰においてはどうかと問われると、「赦したほうがいいのはわかってる」と、どうにもならないジレンマに心が乱れるのです。この時、人に目を向けることをやめ、ただ神様だけに心を向けるなら、「赦せるものなら赦して自由になりたい」「本当は赦したい」という願いこそが自分の本心だと気づきます。

赦すことと赦されることは同じです。私たちの苦しみは、赦せないところにあるからです。

私たちは、自分に悪事を働く人を、どうやって赦せばいいかわかりません。赦すとは罪を認めないことであり、罪を認めないと、裁かないことです。イエス・キリストは私たちの行いの罪についていっさい裁くことをなさいません。それは、罪そのものを容認するという意味ではなく、罪は神がいやすものだから神に差し出しなさいという意味です。私たちが人の罪を赦すというのも、決して罪そのものを容認するという意味ではなく、自分自身が人ではなく神を見上げるという意味です。私たちの信仰は、神に対するものであり、神と関わるためのものなのです。何のために生きるのか、それは神と関わるためです。

「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。」（Iコリント10:31）

自分の栄光ではなく、神の栄光を現すには、神と向き合うことが必要です。主と向き合い、鏡のように主の栄光を反映させて生きることが、神の栄光を現すということです。人に心を向けるのではなく、神に心を向け、神と関わって生きることが人生の目的なのです。